

〈映画でつづる歴史〉

ジャーナリスト
松本 侑壬子

アンジェイ・ワイダ監督は、愛国の映画監督である。彼の作品はほとんどが祖国ポーランドの歴史、社会、あるいは個人や家族の経験テーマにし、しかも世界中の人々の胸に響く普遍性を持つ。現代の巨匠と呼ばれる所以である。八七歳で挑んだ最新作の本作も例外ではない。むしろ、存命の歴史上の英雄ワレサの伝記映画化は、「これまで五五年間の映画人生で最も困難なテーマ」であり、製作発表の席で「私はこの映画を作りたくない。しかし、私には作る義務がある」と、かつてワレサが大統領選に出馬の際に語った言葉をもじりながら決意を語ったという。

ワレサとはもちろん、激動の時代を一電気工から労働運動家へ、独立自主管理労組「連帯」初代委員長として優れた指導力を発揮、ついに同国の大統領に選ばれたレフ・ワレサ（一九四三年〜）である。これは一九七〇〜八九年に実際に起

こつた出来事に基づく、いわば映画でつづったポーランド現代史だ。劇中、当時の記録映像が巧みに挿入され、中には当時ニュースで見たような激しいデモ風景、ソ連（当時）要人と並ぶ政治家の写真、アメリカ議会に招かれて演説する本人の画像など、臨場感あふれる場面に引き込まれる。

映画は、一九八〇年、ワレサの住む労働者団地の自宅を訪れたイタリアの有名な女性ジャーナリスト、オリアナ・ファラチのインタビュに答えるワレサの回想の形で展開する。厳しい労働運動や権力闘争に明け暮れる中で、ワレサは自分の弱点や失敗も隠さず思う方へと突き進む、多彩で矛盾に満ちた人物だ。その一筋縄ではいかない夫をしっかりと支え、子どもさん（男女八人）の家庭を守り、ひとり家事育児をこなす妻ダヌタ。控えめに見えて、官憲の家宅捜索にも毅然と対処するなど、「ダヌタあつてのワレサ」

と言われていた。後にワレサがノーベル平和賞を受賞（一九八三年）した時には、出国禁止の夫に代わり出席、堂々と世界にメッセージを発した。先年、出版した彼女の自伝は三〇万部のベストセラーになったという。今なお国民的人気の高さが伺われる。

映画に登場するもう一人の女性、ファラチは全く対照的に描かれている。トップファッションに身を包み、足を高く組んで絶えず煙草をふかしながら、矢継ぎ早に攻撃的な質問を繰り出す。世界中の有名人やセレブを相手の突撃インタビュで知られる華麗なジャーナリスト。社会進出する女性の最先端を行くキャリアウーマン像としては、あまり好意的に描かれていない。ファラチのキャラクターなのか、夫を懸命に支える妻と女仕事師という立場の違いなのか。

一匹狼のワイダは、かつてワレサの推薦で一期国会議員を務めたが、その後「連帯」の分裂でワレサとはたもとを分かった。それでも、祖国の危機を救った英雄としてワレサを映画で描くのは自分しかない、と本作を撮った。欲を言えば、人間ワレサの、さらに英雄としてのオーラが、画面にもっと欲しかった。

『ワレサ 連帯の男』

ポーランド映画 (127分)

監督：アンジェイ・ワイダ

出演：ロベルト・ヴィエンツキエヴィチ、アグニエシュカ・グロホフスカ、マリア・ロザリア・オマジオ

4月5日より岩波ホールほか全国順次ロードショー

©2013 AKSON STUDIO SP. Z O.O., CANAL+CYFROWY SP. Z O.O., NARODOWE CENTRUM KULTURY, TELEKOMUNIKACJA POLSKA S.A., TELEWIZJA POLSKA S.A. ALL RIGHTS RESERVED

